



私は、「高校生による海外エネルギー事情研修会」を通して、日本や海外のエネルギー事情はもちろんのこと、それに対する海外の高校生の意見や日本の文化に対する印象、また海外の文化を知ることが出来ました。

エネルギーの面について、事前研修では様々な資料や事務局の説明をもと、日本のエネルギーを考える上で特に重要な課題を2つ発見しました。1つは「一次エネルギーは石油、天然ガス、石炭の3種で約90%を占め、発電の面でも火力発電に依存している」こと。もう1つは「石油資源を中東諸国に依存するなどエネルギー自給率が低い」ことです。

日本は、この問題を解決するために再生可能エネルギー発電比率の引き上げを目指しておりますが、私はそれには現状では限界があり、既存の技術である原子力発電を利用する必要があると思いました。しかしながら、日本は核燃料サイクルも未だ完成しておらず、放射性廃棄物の処分方法も決まっていないのが現状です。それに対し、フランスは原子力発電が約70%を占め、使用済み核燃料サイクルが行われており、スウェーデンは原子力発電が約40%を占め、使用済み核燃料を再利用せず廃棄処分しています。原子力発電の利用において日本に必要なことを長期にわたり実践してきた両国の施設を見学することで、日本のエネルギーについて深く考えようと思いました。

事前研修では、東北電力(株)東通原子力発電所、日本原燃(株)原子燃料サイクル施設を見学しました。福島第一原子力発電所の事故を踏まえ、安全対策をこれまでよりも多様化、多重化していることや核燃料サイクルの仕組み、そして、日本では現在、多くの使用済み核燃料が処理されず、プールで貯蔵されたままであることを学びました。

フランスのラ・アーク再処理工場では、実際に使用済み核燃料の再処理が行われている施設を見学することが出来ました。2機のプラントがあり、一方では工程ごとに隣接して制御室が設けられ、他方では日本原燃再処理工場と同様に工程ごとにフロアで分けられた中央制御室が設けられていました。どちらにおいても、遠隔操作で作業を行い、機械のメンテナンスなども別の機械を用いて、放射能から従業員を守っているそうです。

また、再処理により廃棄物の量とそれがもつ放射能を減らすことができ、得られたプルトニウム1 gからウラン100 g、石油100 tと同等のエネルギーを得ることが出来るというメリットも知ることが出来ました。その他、日本では、原子力などの施設外壁は白などの決まった色に塗りつぶされていることが多いですが、オラノ社の施設では、景観なども考えて様々な色が使われていました。また、今回は、通常なかなか入ることの出来ない場所へも見学させていただいて、とても貴重な経験になりました。

スウェーデンのフォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物貯蔵施設では、スウェーデンにおける放射性廃棄物の処理について説明を聞くことが出来ました。日本では、放射性廃棄物の処分地を検討する際、活断層の有無など地震による被害を議論されており、原子力発電所についても地震や津波への対策を重視しているようですが、スウェーデンでは、地盤の固さについて調べたり、地盤から水が漏れ出てくることを防ぐためにコンクリートで固めたりするなど日本とは異なる視点で取り組んでいることが分かりました。特に、フォルシュマルクは固い地盤であるだけでなく、原子力発電所があることなどから、この地域での原子力や放射性廃棄物への意識が高く、貯蔵施設の建設に対して周辺住民の77%の賛成を得られたそうです。さらに、周辺の小中学校の生徒を招いて、施設の概要を説明したり、住民の質問にもいつでも答えたりするなど事業が透明でかつ認知させようとする姿勢が強く、日本でも、もっと原子力関連施設への国民の関心・理解を強める活動をする必要があると思いました。

現地高校生とのエネルギーによるディスカッションでは、自国だけでなく日本のエネルギー問題についても考えを述べる事ができる生徒が多く、エネルギー問題や環境問題に対する意識の高さを感じました。

フランスでは、中学校で自国のエネルギーについて学ぶ時間があり、エネルギー政策の良い面と悪い面を踏まえ、客観的な視点から学ぶ事が出来るそうです。日本にもそのように義務教育の課程でエネルギーなど日本の抱える問題について客観的な視点から深く考える時間が必要だと思いました。

フランスのエネルギー政策では、今後は原子力発電比率を引き下げ、再エネ比率を引き上げる目標であるが、原子力発電がなくなることによる経済的な影響を懸念するといった声があり、日本に対しても、様々な再生可能エネルギーを検証して、徐々に転換していくのがよいのではないかという意見がありました。

---

スウェーデンでは、「日本において原子力発電はどれだけ安全を追求しても実際に事故が起こったのだから、二酸化炭素を排出しても火力発電に頼ったほうがよい」という意見と「原子力発電は必要だ」という意見とで、高校生の中でも意見が分かれています。共通して言っていたのは、発電の面について考えるだけでなく、電力消費量を減らすという面について考える必要があるということです。私は、本研修におけるエネルギー問題について考える中で、この考えに至る事がなく、多様な視点から物事を見ること、そして自身の意見を表明することの大切さや難しさを改めて感じました。

今回の研修で、エネルギー問題の他に目標としていた「現地の人と積極的に交流する」「異文化への理解を深める」ということについては、主に現地高校生との交流の中で達成することが出来ました。フランスでは、特に日本の芸術へ興味を持っていたので、十和田市現代美術館や私が修学旅行で訪れた寺社などの写真を交えながら話し、フランスの芸術も教えてもらいました。その中で、不安を感じていた英語を使って積極的に会話をすることができ、成長することが出来ました。スウェーデンでは、3日間交流したこともあり、様々な話題について会話ができて、その中で日本と違う点をたくさん発見することが出来ました。スウェーデンの高校生は、日本語がとても上手であったこともあり、自分も英語をもっと話せるようになって、より意思疎通が出来るように努力していきたいと思いました。また、どちらの国においても日本より生徒の自由度が大きいこと、その代わりに自己責任が伴っていることがわかりました。現地の高校生とは連絡先を交換し、連絡をとっているため、これからもこのような関係が続いていくように努力し、再びフランス、スウェーデンを訪れたいです。また、この研修会をきっかけに将来、留学もしてみたいとも思いました。

この研修会では、これまで本研修に携わった方々や海外の高校生など、様々な人の考えを知ったり、異国の文化を体験したりと、普通の学校生活をしているだけでは得られないほどの経験をすることが出来ました。

一緒に行った5人の仲間たちの協力、引率して下さった大人の方々をはじめ、多くの方の温かい支援のおかげでこのような体験が出来たことに感謝を忘れず、これからの人生につながるように日々努力していきたいと思えます。



